

講演 北海道経済における林産業の振興

田 畑 允

昨年11月、旭川市において行われた講演のあらましを紹介する。

石や金属などの材料から日本の文化である木や紙へと変化している欧米人の嗜好変化にふれ、新しい構想を持ちながら進まなければ本道の経済自立が難しいこと、そのためには国の政策の動向を見極めながら本道の林産関係者が積極的に声を出す必要があり、来たる昭和60年に当たる国連の「国際森林年」に当たるころから緑と木の大切さ、その利用について国民の理解と世論を盛り上げるため、ジャーナリストをもう少し使っても良いのではないかと、といったことを中心に話された。



北海道新聞旭川支社報道部長
論説委員 釧路市出身(54才)
昭和29年早稲田大学卒、北海道新聞社入社、東京編集局で主に政治を担当、47年社会部次長として本社勤務、UHBテレビの初代ニュースキャスターも経験。その間、特に地域開発・産業振興で健筆をふるわれる。また、道東のパイロットフォレストや道南スギなどの取材を通じ、林業・林産業への造詣が深く、一言言を持たれている。

石から木の文化へ

さて、アメリカでは現在、大変な日本食ブームのようです。私達は終戦後、アメリカ軍放出の脱脂粉乳とコッペパンの給食で生命をつないだものでした。肉を加えた欧米型の食事型を取り入れました。米やみそ汁からパンや牛乳へ、タタミからイスへと私達の生活様式は大きく様変わりしてきました。

ところで、イギリス人はカシの家具を、アメリカ人はナラの家具を用いているようですが、これらと同じように日本食に象徴される**日本文化**といったものに数年前から大きな関心が向けられているようです。スシ、豆腐、米飯、そしてジュードー<柔道>、ゼン<禅>、カラテ<空手>、イケハナ<生け花>そして木と紙などが彼らの関心の的でした。これまで何回かの欧米への旅でそのことを知りました。

私が今ここで伝えたいのは、**石と金属**といった欧米の文化に対し、彼ら自身が嫌気をさしている事実です。私達が終戦後に経験させられたパンと脱脂ミルクのパターン、ナイフとフォークというパターンは、欧米人が何千年もかけて築き上げた文化であるはずで、最も基本的な食べる文化であり、住む文化なのです。それに対して、それぞれの街の中堅層、大きく言えばアメリカという国の社会の仕組みや社会情勢、そして物の見方を変える力のある中堅層に気持

はじめに

今から25～6年前、中村釧路営林署長(当時)から道東の標茶・厚岸両町にかけてパイロット・フォレスト計画について取材、それを何回か記事にした。それを新聞がまだ8～12ページだった時代に、1ページの特集にしたのが、私の林業記事とのかかわりの始まりでした。

時は移って現在、カラマツが間伐の時期になったが採算がとれないという新聞の記事を読むと、私の記事は間違っていたのだろうか、カラマツを植えると紙面に何度も書いたことは間違っていたのだろうか、と考えるこ

とがあります。

1週間ほど前、国策パルプの方に会う機会があったので同じ質問をしたところ、「それは違う、カラマツはいろいろな問題があってこれからも苦労があるだろう。しかし、今後10年、20年、30年とたってみると、やっぱり良かったという時期が来ると思うよ」と言っていただき、今日ここに立つ元気をもつことができました。

そこで、この20数年、木や森の問題について折にふれて考えてきたことをお話ししたいと思います。

ちの変化が生じてきています。そういう流れが無視できないほどあるのです。

日本は、木と紙の文化と言われてきました。これには、マッチで火をつければすぐに燃えるという、どこか軽べつ響きも込められていました。しかし、今の欧米の人々は自分達が何千年もかけて築き上げてきた文化に背中を向け、その心を東洋に

特に地図上では小さな位置を占めるに過ぎない日本に向けています。

もちろん、全体ではなく一部の人ですけれども、相当部分の人たちの心にもしも風見鶏の羽根がついていたなら、それは石から木へと向いていて、これからはもっと多くなると思われます。また、一般の人達が知っている以上に生け花とか書道や折紙などの文化が浸透しているのです。

さて、これは私の個人的な経験なのですが、東京で暮らしていた頃、おつき合いをさせて頂いたおばあさんがいました。家族が仕事に出た後、高層マンションや団地の間にあるほんの小さな公園にいつまでも座っているのをよく見かけたので、その理由を聞きました。「コンクリート造りの家、おまけに真っ白の家では気がいら立ち、寂しくて居られない」ということでした。このような人は意外と多いようです。

つまり最近のアメリカ人や日本人の心の中に生まれている変

化はいま私達の身の回りにある食・住文化を否定しようというもののようです。戦後、私達が選択した格好良かったもの、便利なものに対する何か違う考え方、感情の流れがあり、それが次第に強まり、広まっているように思います。

木は太陽エネルギーの塊

私の書棚を整理してみると、木材や森林関係の本や資料がいくらかたまりました。その中で感心した言葉に「木は太陽エネルギーの塊なんだ」というのがあります。言われて、改めて本当だと思います。何十年、何百年とかけて葉を広げ、幹が立ち、太陽光線をつかまえて繊維質として固定します。その間にも人間社会に生き生きとした恵みを与えてくれています。つまり太陽熱の塊を、取ったり動かしたり、切ったり削ったりして私達、人間 とくに日本人は生きてきたのです。この意味をもう一度整理して、私達の子供たちにきちんと教え込まなければならぬ時期だと思います。

というのは、東京や大阪の子供達は、コンクリート造りなのが住宅であり、木造住宅に入っているのはレベルが低いと感じるようになってきている、と指摘されているからです。マンションビルは、ほとんどが戦後30数年の歴史しか持っていません。それに比べると、木造家屋の歴史ははるかに古く、大都会ではここ5～6年の間に老朽化が目

立ち、みずぼらしく見える事情があるのだと思います。そのため子供達は、マンションに入っているのが格好良いと感じるわけです。また、多くの子供達にとって、学校や図書館そのほかどこに行っても木造の建物に触れる機会が少なくなっていると言っています。

地価に見る北海道経済

ここで心の流れについての話から離れ、経済問題を取り上げてみたいと思います。

先日、日本の地価についての報道があり前年対比では落ち着いてきていることがわかりました。その中でこれは大変だと私が感じたのは、北海道とか青森や熊本や鹿児島などで地価が下がっている事実です。たとえば北海道の平均地価が下がっているということは札幌・旭川で上がっているのですから、どこかで大きく下がっていることになります。つまり農地や山林価格が下がっているのです。また農家負債も表面に出ている数字以上になっていて、企業で言えば倒産というところまで内部的に進んでいるようです。そして減反は一時的には緩和されるかもしれないかもしれませんが、恐らく来年以降は今まで以上に厳しくなるだろうと思われ、北海道の稲作はもっと低めに見なければならぬ状況にあります。それらが地価に影響します。

日本の経済は底離れして上がっていくムードにあるといわれま

すが、北海道は取り残されているようです。景気は3年が2サイクルの6年単位で動いているようですが、北海道だけはタイム・ラグがあるような気がします。

企業の合理化

私の会社は、旭川で年間1万2千トン以上の紙を使い、全社的にはこの5、6倍を使うのでしょうか。言葉は悪いかも知れませんが**木を食べる産業**の1つです。その会社は、この30年間、10年ごとに一度の大きな変革を経てきました。ふえる情報量を機械化、電子化、省力化で紙面化するシステムで対応しました。

今から30年前の新聞は8ページ、夕刊4ページが通常でした。20年前は朝刊16ページ、夕刊8～12ページとなり、現在では朝刊20～24ページ、夕刊12～18ページまでに厚くなっています。これを新技術、新機械の導入による省力化によって達成してきました。昔のように鉛の活字を使った編集をやっていたのでは、現代のプレス戦争を生き残れなかったと思います。内部のせい肉を削り、そこに新しい機械を導入する努力を続けてきたのです。

こういった合理化や省力化は製造業全体で取り組まれていると思いますが、では木材業界はどのようなのでしょうか。細かい数字は省きますが、内部改善はまだまだ遅れているように思われます。一番遅れているという指摘もあります。どうでしょうか。

新しい動き

さて、木造住宅を建設する比率は次第に落ち込んできて、50%を割り大変なことになってきているようですが、その一方で業界の方々が集まり需要を自分達でつくり出そうとする動きが、あちらこちらで出ています。たとえば福岡県の木材協同組合では今年から県を動かし、20タイプの木造住宅をコンペで募集し、その家を建ててもらうキャンペーンを始めたようです。

このような動きは業界新聞が適格に伝えていると思いますが、2～3年前からあちらこちらで聞くようになりました。そこで北海道を調べたところ、木造住宅を建てる時の貸し出し制度はありますが、今ひとつ利用が鈍いのです。我が国で一番資源に恵まれていると言われる**林産王国北海道**としては、まだ足りません。ただその中で、ログハウスについては道の方々や業界の方々が一生懸命取り組まれて、今年から認知されたと聞き大変うれしく思いました。

しかし、まだ問題は多いようです。現在、1千㎡以上の大きな建物をつくる場合は、木の部屋は作れないわけです。これは建築基準法に決められています。これもまた林産王国北海道くらいは、農林水産省の補助金の特例はいらないけれど、道内では必ず作れといった法制度の特例はあってもいいと思います。北大の先生は「私達のおじいさん達は北海道の木で建物をつくっ

ていた。身の回りにある木が、何十年、何百年と北海道で育ち太陽光線を吸収してきた木こそが、北海道に住む者にとっては一番良い」と話しています。とりあえず補助金を北海道に特別によこせと言うことはもうやめて、南から北まですべて同じ法律でくくる考え方を変える必要があります。そういう新しい意味での北海道特例を求める声を、我々を利用して世論として形成させて頂きたいと思います。

九州における新しい動向ですが、旭川と同じように家具産地として有名な福岡県の大川町では、関連含めて約350社位ある家具メーカーの1割にあたる35社が今年の9月までに倒産しています。昔ながらの技術に頼り今日的な需要に合わない家具をつくったり、財務上やドンプリ勘定的だったことに原因があるようですが、この街で新鮮な試みが始まっています。

先行きに危機感を持った若者を中心に、3～4年ほど前から県と組合から1人60万円をもらってヨーロッパに行っています。私が10日ほど前、弟子屈の「ヨーロッパ工芸館」で17～19世紀のイスを見たように、デザインや人間工学的設計、製法などを勉強してくる。そして、60万円もらったかわりに、勉強の成果を何らかの作品にして出品することを義務づけているのです。

また、九州の大学のうち農学部を設けているのは5つありますが、この5大学で1つの農学

系大学院をつくる動きもあります。バイオマスなどの新技術への対応、変化している原料事情への対応などが動機となっているようですが、国もある程度好意的に受け取めていると思われる。その点でも本道は遅れています。

実は北海道でも7年ほど前になりますが同じような話を聞きました。留萌管内の若手が集まっているいろいろな意見を出し合った席で、天塩と初山別の方が、「まだまだいろいろな知識も技術も乏しいので、道立の林業大学校みたいなものが設立できないものだろうか」と言っていました。その後で、音威子府たくみで木の匠の村づくりが始まった。そして東川でも、苦勞がいっぱいの今だからこそ地域に根づく農科大学がぜひ欲しいと言っています。

人づくりでも技術練磨でも、流通戦略でも九州の方が私達の北海道より気力と実行力で数段、上回っている印象を受けます。向こうがそうせざるを得ないほど切羽つまっていて、本道はまだそこまで行っていないということでしょうか。また、飛騨の高山では、国際林業大学校を設立する計画が進んでいます。これは林野庁が強く後押しをしていて、国有林を大学用地に開放すると言われていいますので、どう動くか極めて関心がもたれます。

このように、それぞれの地域では状況が悪い今だからこそ、

次をめざして多くの発想や構想が動きはじめています。北海道でも、いろいろなアイデアを持っている方はたくさんいると思いますが、まだまだ声になっていません。私達ジャーナリストも声を掘り起こし広げる努力が足りないと感じています。

社（やしろ）と外材

このごろ、あちらこちらで村の小さな社がきれいに建て直されているのを見かけます。最初は粗末な社だったと思います。それが最近になり、心の落ち着きとコミュニティを求める時代の要請によって、鎮守の森の社を新しく作り直しているのだと思います。北海道も苦勞は多いけれど、結構いい足どりなんだと感じさせます。

ところが、北海道神宮が再建されたときには、外国の檜ヒノキを使ったと聞きました。日本の神社が日本以外の国の木で建て直されたことに、私は大きな抵抗を覚えました。実は今日の状況を象徴する一つの良い事例でもある、と考えさせられました。

現在、輸入材の比率は約7割になっていて、丸太のままでの輸入はだんだん難しくなってくるでしょう。日本人はキクイムシであることは、これからも止められないでしょうが、ここで考え直してみる必要があるようです。

川上と川下

これは大学の先生からの受け売りになりますが、山の木や水源保全のため川下の人達が水道料金に10円位を加算して払い、それを川上のために使う仕組みや制度をつくってはどうか、という意見が少しずつ強まっているそうです。特に九州では夏に水不足となることが数年に一度あり、やっぱり困れば工夫しよう、制度化できないだろうかと考えるわけです。

北海道では最近、石狩川で水害はありましたが、日照りとか川下で水に困ることがないので、そこまで進んでいません。しかし、安全でおいしい水を使える川下の人達が、そういう水をつくり出す山や森を育てている川上の人達に思いをはせるということは、日本的・東洋的な考え方で理にかなっています。のどが乾いている時に飲んだ水をおいしいと思った人は、井戸を掘った人を忘れるなど言いません。それと同じ考え方です。

ただし、困らなければ考えられないのも人間の常で、川下つまり札幌の市民が考え始めるような一石を投じる必要があります。札幌には、山や木についての情報があまり入ってこないもので、どうしても木を切るのはすべて悪であるという感覚になりがちです。そこを変えていくためには業界の皆さんが、大学の先生達なり試験場の方々に働きかけて、情報を広げる努力をして欲しいと思っています。

バイオマス

旭川でも帯広でも道内各地でバイオに関するニュースが連日のごとく伝えられています。しかし、北海道ではまだオシャベリの段階です。つまり研究会をつくった、勉強会をやる、資料を取り寄せよう、先生に来ていただいて講演してもらおう、といったオシャベリの段階なのです。その点、九州や盛岡、仙台は既に一歩も二歩も取り組みが進んでいます。ですから北海道は経済の立ち遅れに加えて、意識の面や実際の取り組みでも立ち遅れているようです。つまり北海道は迷っている最中なんだと思います。旗を鮮明にかかげて進むバイタリティがもっとも必要だと思います。

さて、今までは農畜産業との関連でバイオが語られ、林産試験場などが取り組んでいるのは木を牛が食べられるようにすることつまり飼料化です。まだ道内ではあまり着目されていないようですが、森林バイオマスの中で一番意外で可能性の大きいものは薬品だと思っています。薬品バイオセンター的な形です。

13~4 あるバイオ研究会の中で関心が向けられているのは、道内から400~500万トン出ると言われているササです。今後、魚で言えば頭から尾まで食べてしまうような、**木材資源を完全利用**する時代が必ず来ます。そして、よく例に出されるのは函館にある日本飼料という会社

で、悪臭を発生するだけであった魚貝類の処理廃液から、今ではいろいろな薬品を合成しているのです。

木材産業の川上から川下への流れの中に、バイオセンター的なものの設置が期待されます。ひょっとすると旭川の街に2次産業が立地する起爆剤になるかもしれません。今あるものを完全に使い切るという考え方の延長線上に、新しい産業の生まれる可能性が秘められています。3年もたてば世の中が大きく変わる現代の技術進歩を考えるなら、十分な可能性を持って進展するに違いありません。そして10年もすれば日の目を見るようなものが現れ、林産バイオセンターとか大雪バイオ研究所といった企業が活躍するでしょう。夢も半分ありますが、そうなるかもしれないという事だけでも覚えておきたいものです。

終りにかえて

9月末、湯沢青年会議所で元首相が昭和60年から10年位の間、35兆円の建設国債を発行して、新しい形の日本列島改造計画を進めなければ経済が参ってしまうと言っています。インフレを呼ばない程度にやや積極策を取らなければ、国民に活力が生まれない、中曽根流の小さな政府づくりではなく田中流の国土づくりを進めなければならぬといった内容です。単なるリップ・サービスに終わるか、陽の目をみるか注目されます。

これのネタは、田中派の政策研究集団を受け持っている道東・浜中出身の大野勝己元駐英大使が2カ月ほど前にまとめた「**日本経済再建に向けての諸提言**」というレポートです。その骨子の第2が注目されます。その骨子の第1は交通の整備です。北海道から鹿児島まで走る新幹線を軸に、たとえば旭川から釧路まで飛ぶような航空路線の整備が柱になります。第2は治山・治水とそれに伴う川上産業の活性化です。第3はサラリーマン減税を中心とする税制の抜本的改革となっています。

このような内容を持つ「日本経済再建に向けての諸提言」をもとにした元首相の講演は、全体が実現するかどうかはともかく、考え方の相当部分は影響力、推進力を持って広がるでしょう。更にニューリーダーと呼ばれる人達も、内容は違いますが経済運営の積極策をあちらこちらで話しています。そしてまた政策を立案する新官僚達は、大きな情報収集力を持ち、落ち込んでいる時に次の3年、5年、10年先のための布石を打っています。60年は国連の「国際森林年」です。ですから、みなさん方をはじめ今こそ北海道も大きな声をあげ、言うべきことは言い、良い動きを呼び込むことに遅れを取らず進んでいただきたいと思います。